

森岡清美の現代家族研究

稲葉昭英（慶應義塾大学）

1 はじめに

森岡は『真宗教団と「家」制度』を学位論文として東京教育大学に提出後、1960年、自身が36歳の時に渡米し、アメリカの家族研究と直に接する機会に恵まれる。もともと英語圏の文献レビューに熱心であった森岡は、アメリカの家族社会学研究の積極的な摂取に取り組み、以降はその理論や方法論を用いた日本の家族の分析へと邁進する。60年代以降の森岡の家族研究は事例やデータから理論や仮説を作っていくような帰納的な方法ではなく、理論やモデルを組み立て、それを日本の家族に適用するというどちらかといえば演繹的な形がとられるようになる。具体的には核家族論を導入した家族類型論、ついでそれにもとづいて類型と分類の関係を動的にとらえようとした家族周期論による分析である（ただしこれらの研究自体は渡米前から着手されている）。これらの研究を進めていく中で、森岡は家族を集団論的な立場から体系的に理論化する構想を固め、これが望月嵩氏との共著『新しい家族社会学』（1983年、培風館）へと結実する。一方で、家族周期論よりも変動についての分析に取り組みやすいライフコース研究にその後は関心を移し、その方法論を用いて1982-84年には自らが中心となって静岡におけるライフコース調査（FLC調査）を主導し、ライフコース研究の日本への導入にも大きな役割を果たす。

森岡自身が述べているように、森岡の研究テーマは多岐にわたり、それを通底するような主題を見つけることは簡単ではない。森岡は1960年代以降、とくに現代家族関連の研究を发表することが多くなるが、彼が積極的に用いた方法論は家族人口学的なアプローチであり、その後の家族研究の多くが扱う家族問題への関心は概して希薄であった。研究の初期段階において家・同族といった制度論的研究に強く影響を受けていた森岡にとって、研究の関心は家族の制度的構造とその変動にあり、家族問題には接点を見つけにくかったのではないかと、思われる。本報告では森岡の研究を跡付けながら、その評価と課題を検討していきたい。

2 家族類型論

日本の家研究とアメリカの家族社会学研究の接合を意識していた森岡は、核家族の組み合わせから家族を記述する類型論を用いて「家」の構造を記述し、家から現代家族へという家族変動を記述することを試みた。森岡は分類・類型・典型という概念の差異を強調し、とくに制度的・規範的な類型とその変化をもって家族変動と位置付けた。直系制から夫婦制へという森岡の定式化は家から現代家族へという変化を核家族論の枠組みによって記述したものであり、日本の家研究を家族社会学的な一般的な図式の中に置き換えようという意図があった。

森岡のこの定式化は経験的なデータによって必ずしも支持されないという批判や、地域的な差異を捨象しているという指摘を受けることになる。ただ、この類型は結婚後の居住規則に着目して作られているために、未婚化が進展し親元に長期間居住する未婚者が増加するようになると、類型としての強みが失われてしまう限界がある点は否定できない。1960年代に未婚化・晩婚化を予測できた家族研究者はほとんどおらず、この点では酷な部分もあるが、森岡の変動図式は90年代以降の家族の変動を記述するには限界があったといえる。

3 家族周期論

森岡の代表的な業績の一つとされるものに家族周期論がある。森岡は核家族の世代間・世代内の連結のしかたに基づいて夫婦家族制、直系家族制、複合家族制という制度的な類型を構築し、それぞれの周期的な変化を家族分類と対応させながら解明することをはかった。この時代は公共利用データが存在せず、統計的な分析を可能にするような環境も乏しかったために、家族周期論として示された成果の多くは少数データにもとづく記述的なものにとどまっている。ただ、家族の周期段階という発想は家族研究や他の社会学分野にまで普及することになり、末子年齢や要介護高齢者の有無などの変数として経験的な研究で用いられることが標準となり、また家族研究は育児期や青年期、脱青年期などライフステージ上の段階を区切って研究が進められるようになる。ただ、森岡自身や他の研究者による家族周期論の成果として今日に継承されるような具体的な研究があるかといえば、そこは微妙であるように思われる。この原因は、森岡自身も認めているように、ジェンダーをはじめとする家族内の非対称的な関係性や不平等の問題などにそれほど関心が向かわなかったことが大きいように思われる。

4 統計的分析

森岡の現代家族研究を特徴づけるものとして、国勢調査をはじめとする公刊されている官庁統計の集計結果の積極的な利用・加工がある。その中心的なものは夫婦家族制化の趨勢に関する検討であったが、データを利用して仮説を検討するという今日一般的な方法の先駆的なアプローチとして高く評価されるべきであろう。

森岡の業績の中でもっとも評価されるべき研究の一つは非家族的生活者の趨勢に関する分析である。森岡は数量的なデータ処理よりはフィールドワークに基づく事例研究が得意であるという自己認識を有していたようだが、『季刊社会保障研究』に掲載された「非家族的生活者の推移」（1981年）はきわめて緻密な水準の高い論文である。ちなみに森岡はこの論文を構想してから1か月で書いたという。時代的な制約もあり、森岡自身はその研究歴においてマイクロデータの計量的な分析はほとんど行っていないが、データ分析に大きな関心を有すると同時に、そうした研究を高く評価していた。

（キーワード：集団論的アプローチ、家族周期論、家族類型論）